

台湾の日本仏教の再検討とその意義

柴田幹夫編

台湾の日本仏教

布教・交流・近代化（アジア遊学222）



A5判 256頁
 勉誠出版
 [本体2,800円 + 税]

一 はじめに

二〇一八年九月下旬、「海外フィールドワーク実習」の学生引率で台湾の高雄・台中を訪ねた一週間後に、台湾の日本仏教をテーマとした本書の書評のご依頼をいただいた。偶然に恵まれた機会のように思った。評者は現代東アジアにおける宗教と社会について、特に、宗教と社会福祉・運動に対して関心を寄せ、香港を主な研究対象として研究してきた。本書は、台湾の植民地時代における日本仏教の布教を再検討するものであるため、本当に私が請け負って良いのかと躊躇するところもあった。しかし、本書を読み始めると、台湾における日本仏教の長い歴史、またはその影響がまだ現代台湾社会に残っていること等を知り、台湾で滞在したときに見聞した植民地時代の話や映像を思い出し、大変興味深く感じながら

拝読させていただいた。

伍嘉誠

本書の背景には、今まで植民地台湾における日本仏教の研究が、史料紹介や個別宗派の事例研究をメインとしたものであったため、台湾全体の日本仏教を概観し、通底する問題を洗い出すような研究がなかったことがある。それゆえ、本書の狙いは植民地台湾の日本仏教を日台双方から、新しい史料を通じて検討し、再評価していこうとするものである。

二 本書の構成と概要

本書では台湾における日本仏教の特質を三つの部分に分けて構成されており、台湾の日本仏教の全体像を描いていることが特徴である。目次と著者は以下の通りである。

序言〔柴田幹夫〕

第I部 植民地台湾の布教実態

日本統治時代の台湾における仏教系新宗教の展開と普遍主義——本門仏立講を事例として〔藤井健志〕

「廟」の中に「寺」を、「寺」の中に「廟」を——『古義

真言宗台湾開教計画案』の背景にあるもの〔松金公正〕

真宗大谷派の厦門開教——開教使神田惠雲と敬仏会を中心に〔坂井田夕起子〕

植民地初期（一八九五～一八九六）日本仏教「従軍僧」の

台湾における従軍布教——浄土宗布教使林彦明を中心に

〔關正宗（翻訳・喻楽）〕

台湾における真宗本願寺派の従軍布教活動〔野世英水〕

【コラム】大谷派台北別院と土着宗教の帰属〔新野和暢〕

【コラム】植民地統治初期台湾における宗教政策と真宗

本願寺派〔張益碩〕

【コラム】台湾布教史研究の基礎資料『真宗本派本願寺

台湾開教史』〔沈佳姍（翻訳・王鼎）〕

【コラム】海外布教史資料集の刊行の意義〔中西直樹〕

【コラム】『釋善因日記』からみた台湾人留学僧の活動〔釋

明瑛〕

第II部 植民地台湾の日本仏教——多様な活動と展開

一九三五年新竹・台中地震と日本仏教〔胎中千鶴〕

日治時代台湾における日本仏教の医療救済〔林權媛〕

台北帝国大学南方人文研究所と仏教学者の久野芳隆〔大

澤広嗣〕

伊藤賢道と台湾〔川邊雄大〕

日本統治期台湾における江善慧と太虚の邂逅——靈泉寺

大法会を中心として〔大平浩史〕

【コラム】日本統治期台湾における仏教教育機関設立の

背景——仏教グローバル人材の育成を求めて〔大野育子〕

【コラム】第二次世界大戦期の台湾総督府資料に見られ

る東南アジア事情〔松岡昌和〕

【コラム】台湾宗教史研究の先駆者——増田福太郎博士

関係資料一斑〔吉原丈司〕

第III部 台湾の近代化と大谷光瑞

大谷光瑞と「熱帯産業調査会」〔柴田幹夫〕

台湾高雄「逍遙園」戦後の運命〔黄朝煌（翻訳・応雋）〕

台湾の大谷光瑞と門下生「大谷学生」〔加藤斗規〕

仏教と農業のあいだ——大谷光瑞師の台湾での農業事業

を中心として〔三谷真澄〕

【コラム】台湾・中央研究院近代史研究所の大谷光瑞に係わる檔案資料について〔白須淨真〕

【コラム】西本願寺別邸「三夜荘」の研究——大谷光尊・光瑞の二代に亘る別邸〔菅澤茂〕

第I部の「植民地台湾の布教実態」は、従軍布教から敗戦までの台湾における日本仏教の布教活動や戦略に関する内容を収録している。台湾本島の本門仏立講（藤井）、真言宗（松金）、真宗本願寺派（野世）から、廈門の真宗大谷派（坂井田）まで、幅広い事例を取り上げ、日本仏教の布教実態を明らかにする。続いて、第II部の「植民地台湾の日本仏教——多様な活動と展開」は、日本仏教団体・指導者による慈善事業・社会活動を概観するものである。第III部は、大谷光瑞と台湾の近代化との関係について論じるものである。

紙幅の都合上、本書の内容を全て紹介することはできないが、いずれも独自の視点を持ち、史料に基づいた論考であり、植民地台湾における日本仏教布教の実態・全体像が浮き彫りになっている。評者は、このような多様で特徴的な日本仏教の宗派・人物について網羅的総合的に評論するような知識も知見も持ち合わせていないが、以下に、気付いた範囲で本書の意義をいくつか提示しておきたい。

三 本書の意義

本書の大きな意義の一つとしては、「日台双方の視点から植民地時代の布教を再検討した」ことである。編者の柴田が序言で説明しているように、「台湾をめぐる種々な問題は、政治、経済を中心として、常に中国との関わりで語られることが多く、植民地台湾の文化や社会、とくに仏教交流について語られることは少ない」（四頁）という現実がある。特に、中国大陸は改革開放後、経済高度成長期に入り、政治的・文化的影響力が増強する中、国際社会、メディア、学術研究等においても注目を浴びることが多くなっている。一方、台湾への関心は相対的に低落している。そのため、中国大陸に偏っている今日の学術界において、本書は台湾研究の重要性を考え直すよい機会となるのではないだろうか。

また、台湾は「宗教の市場」と言われるほど、宗教文化が盛んな社会である。道教廟、仏教寺院、キリスト教会、一貫道場が数多く存在しており、近年では台湾へ出稼ぎに来る東南アジア労働者の増加により、イスラム教の施設も増えている。現代台湾社会の多様性や台湾人の考え方・行動パターンを把握するためには、こうした歴史上において実践されてきた宗教文化に注目する必要があると考えられる。本書で扱った「植民地時代の日本仏教」という視点は、現代台湾社会の

歴史、文化、制度、政治の変動を理解する上での一つの重要なカギだと言えるだろう。

特記すべき具体例としては、松金による真言宗台湾開教の事例がある。現在西門町にある媽祖を祀る天后宮が本来、台湾布教のために日本の真言宗が建立した開教本部であったことに、評者は驚きを覚えた。松金によると、植民地時代に、真言宗は台湾本島の「廟」を仏教の「寺」として利用し、それが結果として本島人信者の獲得につながった。この「『廟』の中に『寺』を注入する」(三三頁)という事例は、当時の真言宗の宣教戦略、総督府の皇民化政策などへの理解に斬新かつ重要な視点を提供している。また、戦後において、真言宗の開教本部であった「寺」が媽祖の「廟」へ移行したことは、台湾政府の宗教施設の活性化や台湾人の民間信仰の復興への期待にも絡んでいる。物理的なレガシーとして残された日本仏教寺院が、媽祖信仰の「宗教的空間」として存続することから、台湾(人)の宗教文化への柔軟性も示唆されているだろう。加えて、大谷光瑞の旧宅である「逍遙園」や「西本願寺広場」も含めて、日本領台時代の仏教寺院が政府や現地の人々の努力によって保存され、活用される事例からは、台湾社会の変遷、文化政策の発展、保存活動と市民社会の形成との関係も窺知できる。その意味で、植民地台湾における日本仏

教の歴史を紐解くことは、現代台湾の宗教文化のあり方や台湾社会の変動を理解するにあたって、斬新な視点を提供してくれると言っても過言ではない。

評者の専門である宗教社会学においては、「台湾仏教」といえば、仏光山、慈濟会、法鼓山、中台山と呼ばれる「現代台湾四大仏教」を連想する人が多いだろう。信者数が多いのみならず、慈善社会活動にも積極的に関わっていることから、多くの社会学者がこれらの仏教団体の組織形態や活動に焦点を置いて研究している。しかし実を言えば、台湾では四大仏教以外の仏教団体も当然存在するし、本書の第Ⅱ部でも詳しく記述されているように、植民地時代において日本仏教団体・指導者がすでに様々な慈善事業を展開してきたのである。例えば、地震後の救済活動、医療救済、教育・研究活動等がある。こうした日本仏教団体・指導者による活動は、その規模からすれば現代台湾仏教と比ぶべくもないものだが、社会貢献に対する理念と活動の多様性から見ると、両者には共通する部分が多いことがわかる。植民地時代の台湾における日本仏教の布教・活動とその成否に関する考察は、現代の仏教団体がさらに発展する上で重要な知見になるものと考ええる。その意味で、日本仏教の台湾布教と社会に対する影響、または貢献について再検討・再評価する必要があることを強く感

じている。本書は、こうした現代台湾社会で「主流でない」「遺忘されてしまいうような」宗教団体の歴史の整理、記録、分析の上で、非常に意義があると考えられる。

四 意見と展望

台湾研究・歴史学の門外漢である評者は、本書に対して妥当な意見を述べる知識を持ち合わせていない。あえて言うなら、多くの論文・コラムは文献史料を駆使した史実の指摘を中心としており、これらの史実が今日的な視点からどのように意義づけられ・評価されるかについて、些少な議論があれば、歴史に馴染みのない専門外の読者にとってさらに読みやすくなるだろう。

本書が拓いた研究の地平が今後どのように展開されるかに大いに期待する。一つは、編者の柴田が序言で提示したように、「今回の特集号をきっかけとして、台湾に残る日本寺院の調査とともに、日本仏教が台湾に何を残していったのかを考えたい」（七頁）という方向である。現在、台湾人にとって日常的に通っている寺院・廟は、もしかしたら植民地時代の日本仏教と何らかの形で関わっていたかもしれない。多重的な歴史的要素で成り立っている現代台湾社会を理解するためには、植民地時代の歴史と現代においてその歴史がどのよ

うな形で呈するのかを解明することが不可欠である。

評者が本書に啓発されたのは、日本占領を経験した香港、シンガポール等の地域に同じテーマをアプライすることが可能ではないかということである。香港は台湾と大きく違って、日本占領期間が三年八か月しかなかった。敗戦後、香港の僧侶たちは日本の僧侶宇津木二秀が使っていた建物を受領し、そこに仏教総括組織である香港仏教連合会の総部を設立したという話がある。しかし、日本占領時期の香港において、日本仏教の布教がどのような形で進められたのかはまだ明らかにされていない。その一因は、香港社会を含む東南アジアでは日本占領時期の歴史が現在においてもタブー視されているからであろう。「日港双方」から新しい史料を通じて検討し、この歴史的空白を補うことが今後において重要な課題となろう。

最後に、本書では刺激のかつ多様な事例が所収され、宗教学研究者だけでなく、台湾の歴史に興味を持つ一般読者にも、是非お勧めしたい。また、他の研究者も含めて広汎な研究論文を統括された、編者の力量に対して、深く敬意を示したい。

(一)・かせい 長崎大学多文化社会学部助教